



UWC at 50 Celebrate with Action

UWC 開校 50周年・UWC日本協会設立 40周年記念

2012. 9. 21 於 経団連会館



プログラム

プレゼンテーションの部 17:30 ~ 18:30

1. UWC 日本協会 会長 藤田 譲
2. UWC 日本卒業生会 中田 一志 (Atlantic College 1977-1979)
3. UWC 国際本部 理事
4. UWC 卒業生によるプレゼンテーション

UWC 卒業生プレゼンター

岡部恵子 Atlantic College (1973-1975)
青年海外協力隊 進路相談カウンセラー

小林りん Lester B. Pearson College (1991-1993)
インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢設立準備財団 代表理事

坪内南 Lester B. Pearson College (1994-1996)
BEYOND Tomorrow, 一般財団法人教育支援グローバル基金, 理事・事務局長

小関哲 Atlantic College (1996-1998)
ナガサキアイランズスクール (小さな世界学校) 代表

懇親レセプションの部 18:30 ~ 20:00

1. カレッジの写真等のパネル展示
2. フォトムービー上映

※アナウンスにより5分程度上映させていただきます。

フォトムービー

“What did you learn in UWC?” ~ 過去から現在、現在から未来、UWC 生の成長の軌跡~

UWCへ行く機会を与えて頂き、又支えてくださった皆様への感謝の気持ちを込めて
UWC生がUWCで何を学び、何を感じ、今どのように生きているか、写真と熱い言葉でお伝えいたします。



UWC 開校 50 周年・ 日本協会設立 40 周年に寄せて



藤田 譲
(公社)UWC 日本協会 会長

本年は、1962年に英国に最初のUWCカレッジであるアトランティック・カレッジが設立されて50周年、また、1972年に、UWCの教育理念に賛同した経団連の支援を受けて、日本におけるUWC事業の普及や派遣奨学生の募集・選考のために日本協会が設立されて40周年の節目の年に当たります。この機会に、卒業生や保護者の皆さま、UWC日本協会の役員や会員企業の皆さま、教育機関・大使館関係者の皆さまなどにお集まりいただき、「祝う会」というかたちで、UWCが国際相互理解やグローバル人材の育成においてこれ迄果たしてきた役割や、今後の活動について改めて考える機会を持たせたことを、大変嬉しく思います。

近年の企業活動の更なるグローバル化や、情報化の急速な進展に伴い、わが国ではこれ迄以上に、異なる文化や社会的背景を持つ多様な人々と、外国語でコミュニケーションをとりながら、一緒に仕事をし、世界を舞台に活躍できる人材が求められるようになっていきます。

そのような時代に求められる外国語能力や異文化コミュニケーション能力、チャレンジ精神や協調性などを身につける上で、UWCの教育は、まさに理想的だと思います。また現在、政府は、グローバル人材育成のため、高校卒業時に国際バカロレア (IB) 資格を取得可能な教育を行う高校を、日本国内で5年以内に200校に増やす目標を

打ち出していますが、IB教育においても、UWCは先駆者であります。

経団連では、UWCの教育理念に賛同し、1972年にUWC日本協会を設立して以来、会員企業からの会費を原資とする奨学金を提供して、世界各国のUWCカレッジに奨学生を派遣しております。これ迄に、日本協会から派遣した人数は、延べ487名になります。このように、日本協会が充実した活動を続けてこられたのも、本日の集まりの関係者の皆さまのご支援の賜物と存じ、この場を借りて、御礼申し上げます。

世界13カ国にあるカレッジで、各国から集まった学生と一緒に寮生活を送りながら学ぶことのできるUWCの経験は、大変、ユニークなものであります。

日本協会では、今後も、財政基盤の一層の強化に努め、一人でも多くの日本の高校生の皆さんに、この素晴らしいUWCの教育を体験して欲しいと考えています。

本日の祝う会を通じて、ご出席の皆さまが国際相互理解と多様性への寛容性を育むUWCにおける教育のユニークな価値を再認識され、UWCが国際的教育機関として、益々発展することを祈念いたしまして、私のご挨拶に代えさせていただきます。

これまで 40 年の感謝とこれから



出川 昌人 ブラックロック・ジャパン株式会社 代表取締役社長

1979年オックスフォード大学卒業、仏系のソシエテジェネラル・アセットマネジメント・ジャパン社長を経て2010年11月より現職

日本からユナイテッド・ワールド・カレッジ (UWC) に留学生の派遣を始めて今年で40年目を迎えます。私は第3期の留学生として1974年の夏に、イギリスのアトランティックカレッジへと派遣をしていただきました。私が UWC 奨学生に応募をさせていただいたときには派遣先はイギリス校ただひとつでしたが、今では世界の8ヶ所の学校への留学が可能になり、さまざまな異文化の中での生活を通じて、高校生活の最後の2年間を過ごすことができるようになりました。今、いろんな雑誌や新聞を見ると「グローバルな人材」の必要性が叫ばれ、留学のための広告が目につきます。私がイギリスに留学してからもう40年近くになりますが、私は UWC ほど、しっかりと、そして恵まれた高校生のための留学制度を知りません。この制度に助けられてこれまで400名を超える卒業生たちが、世界の大学に進学し、社会人として巣立っていきました。

1970年代はロンドンへの直行便がなく、私や同期の日本からの留学生7名を乗せた飛行機は途中アラスカのアンカレッジで給油し、北極の上を通過して早朝のロンドンに到着しました。蒸し暑い日本の夏から、いきなり朝が暗く小雨の降りしきる肌寒いロンドンの空港に降り立ったときの不安を、今でも懐かしく思い出します。その直後に知る人ぞ知る英国の食事の味に再度驚いたことも今となってはいい思い出です。

当時は留学することはかなりの冒険でした。社会もそうした学生の受け入れの準備がなく、卒業して戻ってきても門戸を開いてくれる大学は2校のみ、卒業しても職業は英語の教師をすることぐらい、といわれていました。しかし、わずか40年の間に世の中は想像をはるかに超える変遷を辿りました。昨今では逆にそうした体験をした人材が必要とされ、現実的に企業が若い世代を採用する

際には海外での体験を当然の条件とするぐらいに社会も変化をしています。

日本を出発したときは、英語も十分にしゃべれず右も左もわからない高校生が卒業までにはしっかりと自分の言いたいことを主張できる国際人の卵に育っています。卒業したばかりの人たちに、後輩の新奨学生を送り出すための夏のオリエンテーションキャンプをお手伝いしていますが、面接官としてお会いした2年前と比べて大きく成長した姿にいつも驚かされます。そしてその自信にあふれた姿を見るたびに、深い感銘を受けます。多感な16歳の時に、2年間必死になって世界各国からの同僚とともに学び遊ぶことが、どれほど人間を大きくしたかをお見せするには、言葉が必要としません。

UWC を卒業してから35年、社会に出てから30年が過ぎた今、UWC の制度を振り返るとき、その素晴らしさに改めて驚きます。卒業と同時に世界のさまざまな国の大学への門戸が開かれること、そして社会に出てから実に多様な選択肢の中から自らの進路を切り開いていくことができることは、素晴らしいことです。この制度を長きに亘って支えてくださったスポンサーの方々や、UWC 日本協会の皆様に卒業生一同心から感謝をいたします。

私たち卒業生には2つの使命がある、と考えます。ひとつは UWC の卒業生として、それぞれの仕事や活動を通じて社会への貢献をすること、もうひとつはこうした体験を自分や自分の家族だけのためだけでなく、これから後に続く世代の一人でも多くに留学の機会を与えることができるようにすること、です。卒業生は UWC の制度のよき成果の象徴となれるよう、これからも努力をしていきたいと思っています。

UWC 経験から次の世代へむけて

青年海外協力隊ボランティアを経て、
途上国から世界をみた日本青年はその後何をめざすのか、グローバルな生き方を考える



岡部 恵子 (アトランティック・カレッジ 1973-1975)
青年海外協力隊 進路相談カウンセラー

1992年慶應義塾大学文学部卒、2007年東京大学大学院国際貢献修士。UWCでの第3世界理解教育と多国籍学生との生活経験から開発途上国に関心を持ち、ヨーク大学で音楽療法を学び、企業勤務後、青年海外協力隊員としてタンザニアで2年活動。外務省、国際協力機構、国連等勤務を経て2003年より現職。現在は独立法人国際協力機構 (JICA) 青年海外協力隊事務局の進路相談カウンセラーとして帰国ボランティアの進路支援を行っている。

青年海外協力隊と UWC ?

青年海外協力隊とは、日本政府が2国間協定によって派遣するボランティアのことです。協力隊員は様々な国(約80か国)で色々な職種の仕事(200近い職種)に就いており、年間約1200人が2か月現地語などの訓練後、相手国の組織にひとりて赴任し、課題にとりくみます(例:トンガ幼児教育、ネパール助産師、ルワンダ自動車整備等)。帰国後の進路は100人100様で、国際協力、民間企業、教員、医療福祉、地域の活性化など多岐にわたり、一人一人が異なった将来の夢を抱きます。途上国の人びとの中に飛び込み、価値観の壁をのりこえて見えてくる『新たな世界観』がその後の人生で大きな意味を持つことを、現在、帰国した隊員たちと共に日々実感しています。育った環境の異なる学生たちと共に2年間生活し生涯の友を得ることのできる UWC。途上国からの留学生を含む色々な国の人たちと思いをぶつけあい、一緒に力の限り挑戦する UWC 生は協力隊よりも若い世代ですが、体験を通じて『新たな世界観』を抱くという点で協力隊と共通していると思います。



日本を離れて学ぶ『グローバルな生き方』とは? 『Think globally Act locally』

日本と逆の立場の人々と共感すると、国際感覚が変わる。『グローバルな生き方』とは『海外で何かする』ことではなく『今いるところで世界を意識しながら、足元から行動すること』なのではないでしょうか。世界のどこからでも、未来のために働きかけ、周囲を巻き込み長期的にチャレンジしようと努力することが大切だと実感しています。未知の困難に直面しても、日本人の特性を生かしつつ、世界のどこでも、集団の中の核となって活躍できることが、グローバル人材として今後期待される素養であると私は確信しています。

明日のアジアを担う子ども達のために

日本人の国際化、社会にインパクトを残せるリーダーの育成、アジアの子供たちに学ぶチャンス！日本初の全寮制国際高等学校創設への想い



小林 りん (ピアソン・カレッジ 1991-1993)
インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢設立準備財団 代表理事

1998年東京大学経済学部卒、2005年スタンフォード大学国際教育政策学修士。UWCで真の多様性を肌で感じたことが原体験となり、大学では開発経済を学ぶ。前職では国連児童基金（UNICEF）のプログラムオフィサーとしてフィリピンに駐在、ストリートチルドレンの非公式教育に携わる。2008年に学校設立を決意し、帰国。2009年より現職。世界経済フォーラムが選ぶ「ヤンググローバルリーダーズ2012」として表彰される。

ISAK (International School of Asia) 設立の想い

前職（UNICEF のプログラムオフィサー）時代、貧困層の識字率向上のために路上紙芝居などの活動の支援を行うことはやりがいと限界を感じる日々でした。圧倒的な経済格差が存在する国で痛感したのは、「リーダー層の意識を変えなければ国は変わらない」ということ。UWC 時代に真の多様性を肌で感じた経験、そして前職でのリーダー層の意識改革の必要性という気づきから、アジア太平洋地域そしてグローバル社会のために、新たなフロンティアを作り出し変革を起こせるリーダーを育てることをミッションとした ISAK の設立を決意しました。私はここ日本で、新しい時代の新しい価値観をリードできる人材の育成を目指し、硬直した日本の教育に風穴を開け、新たな風を巻き起こしたいと思っています。



求められる新しいリーダー像

これから益々混沌としていく世の中に、変革をもたらすことができるような人材を育てるには、活躍の舞台が世界であろうと日本国内であろうと、求められる資質は同じだと私は考えます。1つ目は、多様性に対する寛容力。国籍はもちろん、社会的、経済的に多様なバックグラウンドを持つ人たちの価値観を受け入れ、協業できることが、これからのリーダーには不可欠です。2つ目は、リスクを取ることを恐れないこと。そして3つ目は、問題設定能力。何が解かれるべき問題かを嗅ぎ付け、解を見いだす力です。私たちの学校ではこの3つの力を養うことを重視し、どこに行っても自分なりのスタイルでリーダーシップを発揮できる人材を育てたいと思っています。ISAK では、日本国内、そして世界中から多様なバックグラウンドを持つ優秀な生徒を受け入れ、1 学年 50 名の少人数教育を実現します。卒業時には国際バカロレア資格を取得できるため、国内はもちろん、世界中の大学に門戸が開かれる、それが私たちの学校の大きな特徴です。

「生きる力」を創る仕事ー東北被災地からリーダーを輩出

社会的ミッションをみつけることで、困難を乗り越えて、生きていく力を体現する、東北発リーダー育成プロジェクト「ビヨンドトゥモロー」



坪内 南 (ピアソン・カレッジ 1994-1996)
BEYOND Tomorrow、一般財団法人教育支援グローバル基金、理事・事務局長

2000年慶應義塾大学総合政策学部卒業。2006年マサチューセッツ工科大学都市計画修士課程修了。マッキンゼー・アンド・カンパニー、難民を助ける会カプルー事務所駐在、世界経済フォーラム、パーレーン経済開発委員会などを経て、2011年6月より現職。より広い社会、新しい世界を経験し、志を持つ仲間と切磋琢磨することこそが広い視野を持つリーダーの育成に不可欠と考え、そのような機会を若い世代が持つことが東北の復興につながると信じて東北被災地発リーダーシップ教育事業ビヨンドトゥモローの設立に参画。

生きる力

社会に対する自分の使命、それが震災・津波の逆境を乗り越える彼ら・彼女たちの「生きる力」となっています。ビヨンドトゥモローを通して、私はこれまでに、津波で家族を亡くし、住む場所を失い、学び舎を失う、という壮絶な体験をした学生たちと出会ってきました。自分が家族を助けられなかったことを責め、生き延びたことをうれしいと思えないと涙することもあった学生たちとの出会いは、多くのことを教えてくれました。ビヨンドトゥモローの学生は、どれだけ大変な状況にありながらも、自分が「かわいそうな存在」



だとは思っていない。どの学生も、一人一人が、強い「共感力」と「使命感」を持ち、前に進もうとしています。家族を失い、家を流され、放射能の恐怖に怯え、それぞれが困難な生活を強いられている中で、誰もが「東北の復興のために、日本の未来のために、世界の国々のために自分に何ができるか」という意識を失わず、人のため、社会のためになる人間になりたいと、自分の進路を真剣に考える姿勢を忘れていませんでした。UWCで学んだ、自ら思考することの大切さが、ビヨンドトゥモローというプラットフォームを構築する上で活かしていることは疑いようがありません。

求められる新しいリーダー像

ビヨンドトゥモローが目指すのは、「共感する力」を持ったリーダーの輩出。自分や自分の周囲にいる人のことだけでなく、広い社会に属する人々の状況に想いを馳せ、その人たちのために行動していく力こそが、時代を切り開く上で求められるリーダーシップの形だと思います。ビヨンドトゥモローの戸をたたいた学生たちは、そのようなリーダーシップが東北の若者の多くに存在することを証明してくれています。震災・津波という困難を経験したからこそ、他者への共感をもって広い社会のために行動を起こすことができる人材が出てくると信じ、そんな意欲ある若者たちに、惜しみない支援を送りたいと考えています。

日本の地域社会に根付き、愛されるUWC卒業生たちの試み

UWC 卒業生と長崎県が創りあげた「世界一の修学旅行」



小関 哲 (アトランティック・カレッジ 1996-1998)
ナガサキアイランズスクール代表、ソーシャルプロジェクトコーディネーター

長崎県平戸島出身、2003 年京都大学法学部卒業。2004 年に帰郷。平戸・小値賀島地域の豊かな自然文化を舞台に新時代の価値・ライフスタイルを問う体験・交流型教育プログラムの提供を始め、2007 年夏世界最大級の教育旅行組織「ピーブルトゥピーブル」が派遣するアメリカ人高校生 400 名の修学旅行を JTB 社と共に運営、全世界 2 万 7 千人が参加した世界 48 プログラム中「平戸・小値賀・長崎ルート」が世界第一位の評価を受け表彰されたことが話題となった。

2012 年より九州の地域活性化成功事例を東北の諸団体にノウハウ移転するプロジェクトに取り組んでいる。

UWC 卒業生たちの試み

このプログラムは 5～10 人の UWC 卒業生 (18～25 歳程度) を中心とするチームによって運営されています。普段は外国人と交流することのない日本の一般市民とアメリカの高校生が寝食を共にし、長崎の被爆者や地元高校生と戦争という難しい問題について心を開いて語り合い、国籍の違いを越えた涙を共に流すというプログラムは UWC で私たちが得た経験があってこそ実現できるものです。地域の夏の風物詩として定着したこのプログラムは長崎の県民一般・九州地域のキーパーソンに深く支持され愛されており、その運営主体である UWC 生の存在は地域社会において高い認知・評価を受けています。毎年のように長崎を訪れ大きな責任を担って働く UWC 生の中には地域の深い信頼を得て実の子供のように愛され求められる存在となった若者もあり、UWC 生の姿に憧れ新しく UWC を目指し合格した地元の高校生 (森健太君・PC09-11) もいます。UWC 生が UWC の設立趣旨に恥じない生き方を目指す上で必要なものとは一体何なのか、そのヒントが「UWC よりも UWC らしい」と時に感じられることすらある私たちの島々での生活そして仕事の中に、存在しているように思えてなりません。



求められる新しいリーダー像

様々なモノや文化がゼロから生産される地域社会の現場においては恵まれた教育を受けた若きリーダーが熱望されています。UWC 卒業生の秘める力は私たちが自覚する以上に大きく、世界でいちばんの学校に行かせてもらった私たちにはそこで知った喜びを他者と分かち合う義務と欲求があります。私はこのプログラムを通して起きた一連の出来事を通して確信した「何か」を次世代の若者たちと分かち合うため、来るべき時代の最前線にいる誇りと義務感と使命感をもって働き、将来「本当に大切なものを学ぶための学校」を作りたいと夢見ています。かつて UWC で与えられた何かをお返しする、最高の場所の一つとして。

UWC の歴史

- 2012**
ベネズエラ政府の決定によりシモンボリバル農業専門カレッジが開校、公立大学に転身。
- 2009**
オランダ、マーストリヒトの既存の二つのインターナショナル・スクールを合併したマーストリヒト・カレッジが開校。
- 2006**
国際 NGO による児童支援センターを前身としたコストリカ・カレッジが開校。紛争後の地域統合を目指し、ボスニア・ヘルツェゴビナにモスタル・カレッジが開校。
- 1997**
インド、プーネにマヒンドラ・カレッジが開校。
- 1995**
ヌール・ヨルダン王妃とネルソン・マンデラ前南アフリカ共和国大統領が UWC 会長に共同就任。北欧 8 カ国の政府と赤十字の協力により、ノルウェーにノルディック・カレッジが開校。
- 1992**
香港カレッジ開校。
- 1990**
さらに多くの若者に UWC の経験を与えるべく、UWC 短期コースが誕生。
- 1988**
チャールズ英国皇太子及びルイス・マルカーノ・コエリョ農学博士の尽力により、ベネズエラにシモンボリバル農業専門カレッジが開校。
- 1982**
アメリカ、ニューメキシコ州にアメリカン・ウェスト・カレッジ、イタリア、トリエステ近郊にアドリアティック・カレッジが開校。
- 1981**
南アフリカのアパルトヘイト政策に対抗して、1963年にスワジランドに設立された多民族学校を前身とした南部アフリカカレッジが開校。
- 1975**
シンガポール・インターナショナル・スクールが正式に UWC 会員となり、東南アジア・カレッジと改名。
- 1974**
ノーベル平和賞受賞者、レスター・B・ピアソン元カナダ首相の理念を受け継ぎ、ピアソン・カレッジがカナダに開校。
- 1970年代**
生徒の選出を行うため各国に UWC 国内委員会が設立。これら国内委員会を中心に各国で UWC 設立運動が促進。
- 1971**
シンガポール・インターナショナル・スクールが UWC 準会員として開校。
- 1967**
マウントバッテン卿が初代会長に就任。「ユナイテッド・ワールド・カレッジ」と名を冠し、プロジェクトが始動。
- 1962**
アトランティック・カレッジがサウス・ウェールズに開校。タイムズ紙はこれを「第二次大戦後、教育における最もエキサイティングな実験」と歓迎。

United World College of the Atlantic

アトランティック・カレッジ

1962年- イギリス

ウェールズの西、プリストル海峡を臨む位置に立つ十二世紀の古城を中心としたカレッジ。第二次世界大戦の教訓を経て、最初に作られたUWC創立校である。海難救助など、自然環境を活かした多彩なアクティビティが行われる。

Red Cross Nordic United World College

ノルディック・カレッジ

1995年- ノルウェー

北欧を中心に約70カ国から集まった200人の生徒は、オスロ近郊のフィヨルドを望むフレック・ファーレルで生活する。北欧8カ国の政府と赤十字の協力により設立されたカレッジであり、社会福祉や地球環境問題を重視した教育が特徴である。

The Mahindra United World College of India

マヒンドラ・カレッジ

1997年- インド

学術・文化都市ブーネ近郊の山々とムラ川を望む丘に位置する。生徒は中庭とベランダを持つインドの伝統的な住居に暮らす。持続的発展の追求を最重要テーマとしており、農業を営む地域社会との交流にも力を入れる。

Lester B. Pearson United World College of the Pacific

ピアソン・カレッジ

1974年- カナダ

バンクーバー島の南端、森と海に囲まれたカレッジは、元カナダ首相でノーベル平和賞受賞者ピアソン氏の意志を継承するべく設立された。ピアソン氏の理念に基づき、生徒全員が奨学金で勉強し、難民や少数民族等、あらゆる背景の生徒の受入れに努力している。

United World College in Mostar

モスタル・カレッジ

2006年- ボスニア・ヘルツェゴビナ

紛争の惨禍を経たボスニア・ヘルツェゴビナ再生への貢献を目的とし、2006年に開校。内戦中対立していた国内のあらゆる民族を代表する生徒に、各国からの留学生を加え、ともに学ばせることで平和教育を図る。生徒は市内の寮に住み、最新式の設備の整った校舎に通学する。

Li Po Chun United World College of Hong Kong

香港 カレッジ

1992年- 香港

静かな住宅街である新界の沙田地区にあり、緑に囲まれたカレッジからは、美しいトコ湾を望むことができる。授業は全て英語で行われるが、非中国語圏からきた生徒は、第2外国語として中国語を学ぶことが奨励される。地域社会に根差した社会貢献活動もさかんである。

Armand Hammer United World College of the American West

アメリカン・ウェスト・カレッジ

1982年- アメリカ

ニューメキシコ州、ロッキー山脈の中腹の町モンテズマに位置する。100年ほど前にホテルとして建てられたモンテズマ城を中心とし、その周囲に校舎や寮が置かれている。近隣の自然環境を活かしたアクティビティ、特に山岳救助活動がさかんである。

United World College Maastricht

マーストリヒト・カレッジ

2009年- オランダ

マーストリヒト市東部に位置し、その都会環境を活かしたコミュニティ・サービスがさかんである。これらには学生のみでなく教師も参加し、オランダ教育省と協力しながら、オランダ随一のコミュニティ・サービス・センターとして展開していく予定である。

United World College of the Adriatic

アドリアティック・カレッジ

1982年- イタリア

ラテン、ゲルマン、スラブ文化の交わる場所として、スロベニア国境近く、アドリア海に面したドゥイノ村にカレッジは建てられた。UWC初めての英語圏外のカレッジであり、イタリア語が必須科目。教室や寮は村の中に点在し、イタリア社会のなかに自然に溶けこんでいる。

United World College of South East Asia

東南アジア カレッジ

1971年- シンガポール

シンガポール中心部に位置するカレッジは初等部・中等部・高等部からなり、UWCの中でも最も多い生徒数を誇る。その半数は通学生であり、シンガポール在住の外交官やビジネスマンの子弟が多い。各国より派遣されるUWC奨学生、高等部に属し、寮で生活する。

Waterford Kamhlaba UWC of Southern Africa

南部アフリカ カレッジ

1981年- 南アフリカ

アパルトヘイト政策に対抗して1963年に設立された多民族学校を前身とし、1981年にUWCとなった。近年では内戦や内戦後の状況にあるアフリカ各国からの生徒の受入れに主眼を置き、これら地域の平和を実現するリーダー育成を目指している。

United World College Costa Rica

コスタリカ・カレッジ

2006年- コスタリカ

コスタリカ中央部の農園地帯に立地するカレッジは、南米の恵まれない児童の保護・育成を行う支援センターを前身として設立された。授業は英語とスペイン語の完全バイリンガルで行なわれる。平和教育、多文化尊重、環境保護活動の3点に重点を置いている。

カレッジ紹介

Lester B. Pearson United World College of the Pacific

ピアソン・カレッジ

前には広大な海が広がり、後ろには青々とした森林が生い茂る、そんな自然に囲まれた中にあるのが、ピアソン・カレッジ。芝生の上でウクレレを演奏したり、週末友達とカヌーに乗って近くのマリーナにコーヒーを飲みに行ったり、森に木の実を摘みに行く事も。晴れの日には青空の下で授業。アクティビティーではカヤックや登山などカナダの大自然を活かした活動が盛んであると同時に地域との交流を深めるため地域の奉仕活動にも力を入れています。そんなのびのびとした大自然の中で、86ヶ国から集まった違う意見、価値観を持った生徒が共に学び、刺激し合い、お互いに日々成長しているのがピアソン・カレッジの魅力です。



日本人在校生



日本人在校生



日本人在校生



日本人在校生



日本人在校生



The Mahindra United World College of India

マヒンドラ・カレッジ

インドは一言でいうと、カオス。街に出ると、人、動物、乗り物すべてが活動していて、とても賑やかです。この喧噪から離れつつ、共存をなし得ているのがマヒンドラ・カレッジ。学校周辺は自然豊かで、美しい野生の孔雀を目にする事もでき、授業に行けば異なった考えを持つ友達にあって思わされたりする。国際的な環境を実現しつつ、インドという国を感じる事ができ、自然の中にありながら街に接している。すべてのものが共存する世界、それがマヒンドラ・カレッジの魅力です。

United World College of the Atlantic

アトランティック・カレッジ

一面の緑に、真っ白な羊の群れのコントラスト。プリストル海峡からの優しい潮風が頬を撫でる。世界で一番ゆったりとした時間が流れているだろうここ西ウェールズには、世界で一番賑やかな空間がある。それが、格式高い St. Donats 城を校舎に持つアトランティック・カレッジ。今年もこのハリーポッターのような世界で90ヶ国にもものぼる国々から個性豊かな300人が集まり、国籍、年齢、性別、宗教、経済的背景の「違い」に直面する。そんな違いを互いに認め合い最大限に生かそうとする所がアトランティック・カレッジの魅力的な所です。

United World College of the Adriatic

アドリアティック・カレッジ

朝、村のバルで買ったカプチーノを片手に授業の行われる建物に急ぐ途中、“Buongiorno!”と元気よく地元の住民に挨拶して一日が始まる。ベネチアから約2時間の、アドリア海に面したドゥイノ村。村中に寮や学校の建物が点在しており、村コミュニティとカレッジが統合されており、キャンパスがないカレッジ。それがアドリアティック・カレッジです。授業は英語で行われるけれどイタリア語も必修。イタリア出身の生徒は減ってしまったものの、重点の置かれている奉仕活動や、住民との道端での会話を通して地域との交流が深く、イタリアの都市やスロベニア・オーストリアへ週末に旅行もできます。学校内外でイタリア・ヨーロッパ文化に触れる機会が多くあるのがアドリアティック・カレッジの魅力です。

Armand Hammer United World College of the American West

アメリカン・ウェスト・カレッジ

ニューメキシコを象徴する真っ青な空、カウボーイが駆け巡る砂漠の中に輝く緑、まるで映画のような風景の中に私たちの拠点、モンテズマ城は位置しています。広大な自然を舞台に80ヶ国からの仲間たちとの厚い信頼関係を築く山岳活動、そしてグランドキャニオンの旅なしにはアメリカン・ウェスト・カレッジを語れません。町に出るとスペイン語の看板も多くヒスパニックやネイティブアメリカンの文化の影響も感じられます。お腹を空かし、食堂のあるお城を目指して150段の階段を息を切らして駆け上がる。シェイプアップになると思いきや、ハンバーガーとフライドポテトを目の前にして人生がそんなに甘いわけがない。忙しい中でもときには温泉でゆったりと。それがアメリカン・ウェスト・カレッジの魅力です。

UWC 卒業生会の想い

桶原 葵

2012 年度学生代表

UWC の 2 年間は、我々の生き方や、考え方に大きく影響を与えてくれました。

その意義は卒業生毎に異なるはずですが、感動したこと、楽しかったこと、苦勞したこと、頑張ったこと、そして寝食をともにした世界各国から集まってきた友人たちの存在、それら全てが詰まった 2 年間で自分を成長させてくれた素晴らしい経験であったことを否定する卒業生はいないと思います。

卒業生は、個々が様々な考え方をもち、その生き方も多様性に富んでいます。

しかし、多様性を受け入れ、その機会と接する最高の場であった UWC への留学体験を共有する UWC 卒業生同士の会話や議論は、連帯感を持ち合わせている気がします。世代やカレッジの壁を超えた UWC 卒業生会でのいろいろな議論や活動は、学生の私にとって、とても貴重な刺激となっています。UWC 卒業生が卒業後も、その活動に触れ、卒業生同士の交流を促しながら、UWC 日本協会へのお手伝いを軸に、UWC の活動を広げる拠点として、卒業生会は存在・活動しています。

また、多少、UWC の活動と疎遠になっていても、UWC の事を思い出した時に、「お久しぶり！」と気軽に顔を出せるような卒業生会にしていきたいと思っておりますので、卒業生の皆様には、母校である UWC への支援とともに、日本卒業生会の活動にもご協力頂けます様お願い申し上げます。

UWC の素晴らしさをより多くの人に認知してもらい、チャレンジ精神にあふれた多くの日本の高校生が世界へ飛び出す事が出来、更に UWC への留学という機会が発展していくよう、私自身も一卒業生として力になり続けたいと思います。

【卒業生会 年間行事】

- 4 月 選考会
- 5 月 新奨学生決定
- 6 月 激励会 AGM (卒業生が集まり活動報告を行う総会)
- 8 月 オリエンテーションキャンプ
- 12 月 忘年会
- 1 月 説明会

選考会、激励会、説明会では、学生・社会人問わず多くの卒業生が UWC 日本協会のお手伝いをボランティアベースで行っております。又、6 月に開かれる卒業生会の総会、通称 AGM (Annual General Meeting : 年次総会) では、その年の卒業生会会費の使用状況や、各イベントの活動報告を行っております。12 月の忘年会では Fund Raising (寄付金集め) を行う等、卒業生会は UWC の活動を広げる拠点として活動をし、繋がりを深めております。

(公社) ユナイテッド・ワールド・カレッジ日本協会 会員企業

2012 年 9 月 10 日現在
(敬称略・順不同)

- | | |
|---------------------|----------------|
| 朝日生命保険 | ニフコ |
| ADEKA | 日本軽金属 |
| 伊藤忠商事 | 日本生命保険 |
| 鹿島建設 | 日本ゼオン |
| キヤノン | 日本電信電話 |
| 関西電力 | 日本通運 |
| キッコーマン | 日本郵船 |
| 小松製作所 | 野村ホールディングス |
| 清水建設 | パナソニック |
| 昭和シェル石油 | 日立製作所 |
| 新日本製鐵 | 富士ゼロックス |
| JXホールディングス | 富士通 |
| 住友化学 | 富士電機 |
| 住友商事 | 古河機械金属 |
| 全日本空輸 | 本田技研工業 |
| ソニー | みずほフィナンシャルグループ |
| ソニー・ミュージックエンタテインメント | 三井住友銀行 |
| 第一生命保険 | 三井不動産 |
| 武田薬品工業 | 三井物産 |
| DIC | 三菱商事 |
| 大和証券グループ本社 | 三菱重工業 |
| 東京海上日動火災保険 | 三菱地所 |
| 東芝 | 三菱電機 |
| トヨタ自動車 | 三菱東京UFJ銀行 |
| 日清製粉グループ本社 | 横浜ゴム |

[50 社]

個人会員

(株) ネットプライスドットコム 佐藤 輝英 (アドリアティック・カレッジ 1991-1993)